戦国時代

宗全の代に起きたのが「応仁の乱」です。乱は京を中心に11年に及ぶ歳月続き、京の町は大いに荒廃し、乱に参加した守護大名は長く続く戦により、その勢力が疲弊し、下克上の世へと繋がっていきました。 山名氏も毛利・尼子等の新興勢力の台頭により圧迫され、その支配下の国は但馬・因幡の２カ国まで減り、やがて豊臣軍の但馬・因幡攻めで豊臣の軍門に下ることとなります。

江戸時代以降～

村岡山名

豊臣政権下では、因幡守護職であった山名豊国は秀吉の「お伽衆」として仕え、関ヶ原では東軍に付き、徳川幕府においても「お伽衆」として仕え、七美郡６７００石の領地を得ます。
江戸時代は但馬山名氏に代わり山名宗家として、大名待遇の旗本として存続し、その後、明治２年の石高見直しで１万１千石の大名と立藩します。
最後の藩主であった義路は明治４年、廃藩置県により村岡藩主から村岡県知事に就任。同年、村岡県は豊岡県に合併後、東京に出て陸軍軍人。明治17年の華族令により男爵授爵、貴族院議員を歴任し、子孫は現在に至る。村岡山名で15代、山名氏歴代で32代。

但馬山名

出石の但馬守護職・祐豊の子、堯熙とその子、堯政は豊臣政権下では秀吉の家臣として仕え、関ヶ原では西軍に付き、大阪夏の陣で堯政が没し、残された一族は清和源氏の縁を頼りに各地に散っていきます。
そんな中、豊国は堯政の子、恒豊を養子に迎えることを徳川幕府に願い出ますが許されず、代わりに祐豊の旧臣であり徳川幕臣となっていた清水正親の養子となり、後に山名に復姓します。出石山名は江戸時代は旗本として存続し、明治以降も現在まで営々と続いています。

山名会への入会等

山名会入会について

山名氏末裔・山名家臣団末裔の他、日本中世史及び、山名氏・山名会にご興味の方、ご入会歓迎致します。気軽にお問合せください。

入会金・年会費

・入会金：5000円（入会時のみ）
・年会費：5000円

山名会の関連施設

山名氏史料館

法雲寺に伝わる山名関係の史料、山名会員から寄贈された家伝の宝物等を展示。
平成３年に建設。随時開館。

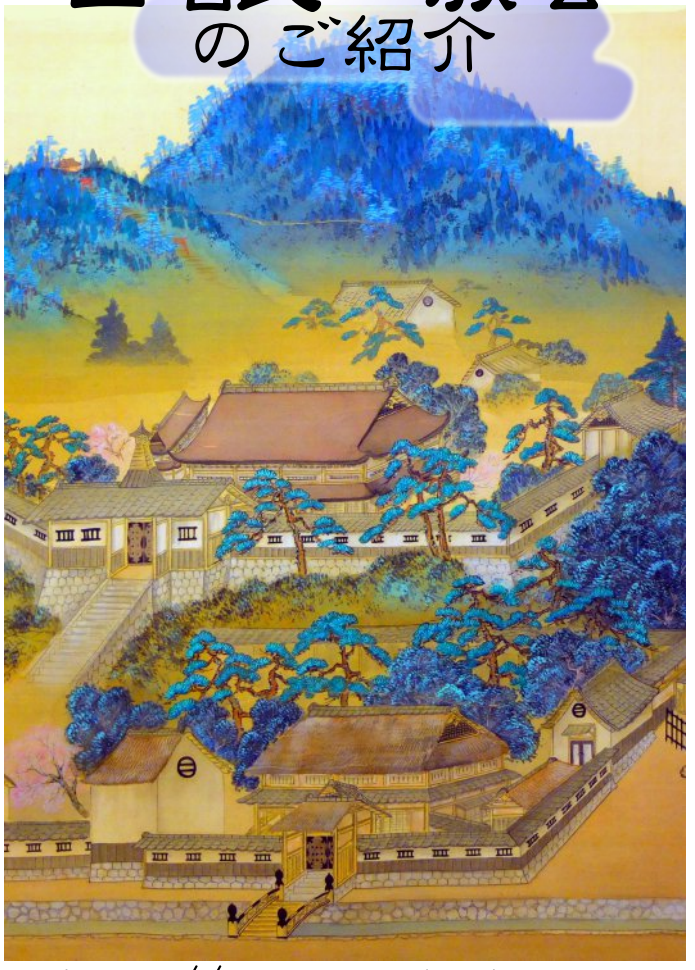
山名赤松供養塔

播但に分かれて数々の戦いを繰り広げた山名氏と赤松氏。平成２年、両氏の子孫が協力して建立。
供養塔は竹田城の中腹駐車場脇にある。

連絡先

〒667-1311
兵庫県美方郡香美町村岡区村岡2365
法雲寺内　山名会
電話：0796-98-1151　FAX:0796-98-1161
メール：houunji@gaia.eonet.ne.jp
http://yamana1zoku.org

全國 山名氏一族会 のご紹介



http://yamana1zoku.org

全國山名氏一族会

全國山名氏一族会（以下：山名会）は、中世室町時代に西国を中心に12ヶ国を領した山名氏及び、その家臣団の末裔を中心とした親睦団体で各地の山名氏史跡を巡って先人の足跡を訪ね、その遺徳を顕彰し、会員相互の懇親を深めることを目的に、昭和61年に設立されました。
以降定期的に、山名氏史跡探訪・歴史講演を中心とする行事を積み重ねて来ました。近年では、山名氏由縁の方だけでは無く、日本中世史や但馬史等にご興味のある方々の会員入会も増えて来ました。
「山名」というキーワードを元にご一緒に歴史探訪の楽しみを分かち合えればと願っております。

（第20回総会（H25年）での一コマ・於出石・宗鏡寺）

山名会の活動

史跡探訪(年次総会)

前述の如く、山名会では毎回テーマを定めて各地の山名関係史跡を訪ね、先人の遺徳を偲ぶ行事を中心として活動しております。訪れる先々では単に各山名家のルーツ探しと言うことだけでは無く、一族の命運を担って中世・近世の歴史の荒波の中をかいくぐって来た先人の息吹を少しでも感じ取っていただけるような計画を心掛けています。

刊行物発行

山名会では、会員相互の山名氏研究・歴史観表明の場として、会誌『山名』を年一回発行しております。同好の誌ならではの他では余り聞かれない諸説や各家の言い伝え、史料など掲載し毎号好評を得ています。また、特定のテーマに則した書籍も過去数冊発行して来ました。何れの書籍も、会員・会員外を問わずお分け出来ますので、ご入り用の方は、お問合せください。

（右側）既刊の会誌『山名』①～⑥号、（青）『山名家譜』、（橙）『山名豊国』、（左）『山名氏八百年』

特別顕彰事業

定期の事業ではありませんが、山名会では山名氏所縁の社寺等の保存・発展の為、微力ではありますが各社寺の護持協力もさせて頂いております。過去の例では、壺井八幡宮再興事業・山名八幡宮神馬奉納・南禅寺真乗院修繕事業・山名赤松両氏供養塔建立・山名氏史料館建設等…に協力させていただきました。山名氏顕彰の為、今後も出来る範囲でのご協力が叶えばと考えております。

（右上）山名八幡宮（群馬）神馬奉納
（右下）壺井八幡宮（大阪）幡と掲揚柱等奉納
（左）禅高公廟所（兵庫）練塀工事協力
その他、数カ所の事業に協力

『山名氏』について

山名氏の起こり

山名氏は、清和源氏の名流・新田義重（源義家の孫）の三男・義範が上州高崎の山名郷を分け与えられたことから、土地の名を取って「山名氏」と名乗ったことから始まります。年代は不詳ですが、氏神山名八幡宮の創建が平安末（1175年頃）であるから、それ以前から山名を名乗っていたことは確実と思えます。

鎌倉山名氏

初代・山名義範は源頼朝（源義家の曾孫の子）の鎌倉挙兵の際、いち早く参陣し源平の戦いで数々の武功を挙げ、「平家追討源氏受領六人」や鎌倉幕府内で源姓を名乗ることが許された「御門葉」に名を連ねました。以降の代々は幕府において引付衆に就き、北條氏が数多くの源氏を排除する中、一族滅亡に追い込まれること無く幕府内の御家人として続きます。

室町山名氏

八代・山名時氏の頃、北條執権の専制に新田義貞・足利尊氏が反旗をひるがえします。新田の分家である山名ですが、時氏からみて尊氏は従兄弟の子で当たるため、時氏は足利側に付き室町時代を迎えます。
室町時代には三管四職の四職家の一つとなり、以降西国を中心に勢力を拡大させ、時氏の代は西国５カ国の守護職となり、次代の師氏・時義の代で７カ国、氏清の代で１２カ国半（一般には１１カ国と言われる）の大太守となり、「六分一殿」と呼ばれようになりました。
明徳の乱の後、山名の守護国は３カ国に減りますが、持豊（宗全）の代には１０カ国まで回復します。尚、西国を中心に各地に山名姓が広まっているのは、守護国が広範囲に渡っていた為、各地に守護代として一族の者を派遣して統治していた名残と思えます。